

## 平成 26 年度第 1 回 首都圏地域コア運営委員会 開催報告

■日時 平成 26 年 8 月 1 日（金）10:00 ～ 12:00

■場所 電気通信大学 産学官連携センター4 階 415 会議室

■出席者 13 名（企業関係者 5 名、大学関係者 8 名）

■議題 電気通信大学の新たな研究推進体制について、地域コアの本年度の活動計画について、  
全国地域コアフォーラム開催について、スーパー連携大学院受講生の共同研究実施状況について、  
2014 年度入学 スーパー連携大学院受講生紹介

■報告、説明、意見交換等

- 電気通信大学の新たな研究推進体制について報告があり、特に、オープンイノベーションのセミナーを進めていきたいと考えている。
- 首都圏地域コアの本年度の活動計画について報告があり、本年度は 2 回実施し、2 回目は 9 月 19 日に開催される「地域フォーラム」検討内容を受けて掘り下げた検討がしたい。また、1 月に予定している首都圏地域コアのフォーラムは、去年度と同じく受講生と触れ合う場としたい。
- 「平成 26 年度地域フォーラム 全国連携による地域人材育成～それぞれの地域活性化のために～」に関する説明があり、パネリストとして参加する企業を募集中である。
- 地域フォーラムのパネリストには、地域を中心とした発表内容が期待されているとすると、多摩地域の中堅企業や TAMA 協会がよいのではないだろうか。大企業はあまり地域性が強くなく、産学連携からも、むしろ中堅企業の方が積極的なのではないか。もともと東京は、大学が地域のコアになりにくい構造である。
- 地域フォーラムについて、秋田等で講演したことがあるが、産学連携に関して、東京のことをそのまま講演しても難しいと感じた。
- 多摩地域には独特の環境があるので、地域フォーラムではそれを紹介するのも良い。
- 多摩地域の紹介には、TAMA 協会の協力を得ると良い。グローバル的な、地域の特徴ある産業を活性化し世界のマーケットを相手取るような視点が欲しい。
- モノづくり企業には地域性がある。
- 現在スーパー連携大学院受講生が実施中である共同研究の成り立ちについて説明があった。
- 本件について、下記の質問や意見があった。
- 博士課程の 3 年間を通してこの共同研究を行うのかについて質問があり、博士課程の受講生の共同研究では、3 年間かけて学位を取得したい旨を先方の企業に伝えている旨の回答があった。
- 普通の共同研究と、これらの共同研究の違いについて質問があり、成り立ちとして、スーパー連携大学院の会員企業ネットワークを活用して成立している点、また企業には、受講生の教育の場であることを理解していただいております、プロジェクトに積極的に学生がかかわる点が通常の共同研究との違いである旨の回答があった。
- 現場の体験は大切であり、これが体系化されカリキュラムに含まれるとさらによいとのコメントがあり、プロジェクトマネジメントの講義を設定したく検討中である旨の回答があった。
- 企業でも、研究者のキャリア設計の中で MOT 等の導入を行っている。それを学生のうちに修得させてくれるのであれば、企業としてもうれしい。

- 国立大学は科目の設置や変更が大変だと思うが、スーパー連携大学院でいろいろチャレンジしてほしい。
- 企業から講師を呼ぶと高額のコストが必要とすれば、他大学の MOT や MBA の講師ならば呼びやすいのではないだろうか。
- 単位を共有化し、他大学の科目を取得できるようにする手もある。愛知県では 24 大学程が集って単位の共有化を行うような取り組みがあるが、東京は大学が多い割には横の繋がりがあまり見えてこない（レーザー分野で東大の教育コンソーシアムがあり、慶応大や電通大も参加している例はある）。
- 地域課題解決のための共同研究がもう少し出てくるとよい。そのために、この地域コア運営委員会が使えるとよい。
- 一般的な研究室では、教員が大体のテーマを決める場合が多く、その中から学生が自分で選ぶ場合もある。スーパー連携大学院受講生の博士研究を共同研究で行うためには、指導教員との早目の情報交換が必要となるだろう。
- スーパー連携大学院では、共同研究を形作る中で受講生が積極的に自分の意見を言う機会があり、非常に恵まれた環境なのではないかと感じた。そして共同研究の中で色々な経験をすることは、学生にとって非常に実践的な力が付くだろう。
- 共同研究については、今回紹介したようなスーパー連携大学院の受講生がいる研究室に限定的に行っていくのではなく、より広く実施していきたい。
- 一般の共同研究と、地域コアの共同研究の違いは学生を入れた人材育成の有無ではあるが、企業側の目線からすれば同じ共同研究で変わりはない。かといって、全ての共同研究をこの地域コアで采配するわけでもない。人材育成を念頭に置いて共同研究の話を進めた結果、学生は付かず通常共同研究となっても構わない、というような意識でやっていきたい。
- 今年度の首都圏地域コアフォーラムでは、スーパー連携大学院受講生に限らず博士学生の発表会を取り入れてみたいというアイデアもある。
- 学生のやりたい研究と、企業のやりたい研究のマッチングが非常に難しい。企業で 3 年間継続するテーマは非常に限られている。
- どの位の時間軸で考えるかで、産学連携のマッチングが大きく変わる。「産から学へのプレゼンテーション」で大学に対し技術の募集をしたことがあるが、あるテーマで、こちらが半年で成果が欲しいところを大学の希望は 2~3 年で、マッチングが不成立だったことがある。

以上